

## 平成 24 年度「教育実習 I」の活動報告

平澤 節子

### 1、はじめに

教育実習 I は、本学科入学の全 1 年生が夏期に附属幼稚園及び実習協力園にて行う実習である。事前指導は前期のプレゼミナール時や実習ガイダンス等で行われ、実習終了後には事後指導を 2 回設け、振り返りや評価伝達を行っている。以下、平成 24 年度に実施された「教育実習 I」の事前事後指導の活動報告を行いながら、今後の課題について検討していきたい。

### 2、事前事後指導の内容

事前指導は例年通り、プレゼミナールの時間に本学科独自の教材『STEP by STEP』に沿って進められた。4 月入学当初は、ゼミナールのメンバーを知ることから始まり、2 年間の実習の流れを確認し、理想の保育者像を語りながら学生自身の目標を明確化した。ゴールデンウィーク明けの 5 月からは教育実習に向けた事前指導が本格化し、幼稚園の一日の流れや教諭の役割等の基礎知識を習得した。それに続き、実習記録の意義を学びながら教育的な視点の持ち方や観察の要点をおさえ、DVD を観賞しながらその場면을記述するなどの体験的な学習が行われた。6 月には手あそびや自己紹介等の保育技術、プレ実習園園長水野美恵先生による講話など具体的な取り組みが行われ、下旬から 7 月上旬の 3 週にわたりプレ実習が実施された。実習後にはゼミ担任がプレ実習の記録を添削指導し、振り返りが行われた。そして一斉指導の最終回では指導案の書き方と注意点について解説が行われ、実習直前のガイダンスでは心構えと注意事項について確認し、本実習への意識を高めていった。

事後指導では、リフレクションシートとプロセスレコードの記入を通して振り返りを行い、実習に対する準備と実際の経験とを反省し、実習生自身の課題を確認する内容となった。

### 3、今後の課題

本学の場合、附属幼稚園を併設していることから、10 日間の本実習に入る前に予備段階としてプレ実習を実施している事が最大の特色と言える。半日ほどの実習ではあるが本実習と同様に、事前打ち合わせの形での副園長講話、自己紹介の部分実習、帰りの会の観察、自由遊びにおける子どもとの関わり、降園後の清掃を含めた環境整備、実習後の記録と提出といった具合に、ミニマムな形ではあるが本実習と同じ流れを事前に体験学習することが出来る。この経験が本実習への覚悟と実習生としての自覚と心構えを養う機会になっているのである。ただし、附属機関がありながら現状の半日という実習時間は体験を積むには短く、学生数と時間割上の制約、そして受け入れ側への負担等により、現段階ではプレ実習時間の拡大は困難かと思われる。学生の実習期間中には教員が各園を訪問し園側の指導者と面談を行うが、その中で『子どもとの関わりに戸惑いを見せている』、『子どもと思いきり遊び込んで欲しい』、『消極的である』などご指摘を頂くことが多い。学生の中には、短大入学前に職場体験として保育現場を経験している者も多いが、実習生として園生活を送りながらも、子どもとの関わり方が分らず、動けなくなってしまう学生もいるようである。このようなコミュニケーション上の苦手意識を克服する為にも、学生が幼児に親

しむ機会を更に拡げていく事も今後の課題と言えよう。

また、この教育実習 I の事前指導はプレゼミナールの時間内に行われることから、学生への生活指導や連絡といったホームルーム的な内容も時に含まれる。また、学生にとって初めての实習となるため、提出書類の記載、提出方法やその期限、実習園への電話のかけ方等、手続き上の指導や事務連絡に多くの時間が費やされる。そのため、実習内容に関する事前指導には限界があり、慌ただしく、グループワークを途中で中断せざるを得ない状況もあり、入念な解説指導に時間を割くことが困難であった。短期大学の初年次は時間割にもゆとりがなく、学生も心身共に疲弊しているようで、高校生活から一転するこのような環境変化に、つまずきを見せる学生が多いのもこの時期である。入学から教育実習までわずか5カ月間という僅かな準備期間ではあるが、学生の実習に対する意識を高めながら将来を見据え、意欲的に取り組めるようなゆとりある指導環境を今後も模索していきたい。